

都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問い合わせは

都留文科大学附属図書館
住所: 402山梨県都留市田原三丁目8番1号
電話: 0554-43-4341(代)
FAX: 0554-43-9844
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

[電子紀要トップへ](#)

ソビエト、ロシアにおける民族と言語問題（6）

民族理論の初期の実践（4）

Nationality and Language in Soviet and Russia（6）:

Nationality and Language Policy of the Early Soviet Socialism（4）

福田 誠治

FUKUTA Seiji

3．土着化 - ウクライナの実践と挫折

エヌ・ア・スクリプニクは、1872年にウクライナのエカチェリノスラフに生まれた。彼の両親は、ともにウクライナ人であった。彼は、ウクライナ語訳のマルクス主義文献を読んで育ち、1900年にサンクト・ペテルブルグの技術学校に入学する。この頃、ロシア社会民主労働党のメンバー、しかも「イスクラ」派というレーニンのグループに加わった。スクリプニクは、この年すでに逮捕されている。また彼は、1903年の党分裂の際にはポリシェヴィキを選択している。革命運動を遂行したために、逮捕、流刑、逃亡、亡命を繰り返すという、彼は生粋の革命家であった。流刑地から逃亡しては、ウクライナで宣伝活動を行っていたのである。

1917年、革命の年のスクリプニクもめざましく活躍している。6月にはペトログラードに戻り、トロツキー率いる軍事革命委員会に加わり、彼はロシア革命の現場に居合わせることになる。そしてこの年の暮れ、12月のこと、レーニンの懇願でウクライナに派遣されることになった。彼の肩書きは、ポリシェヴィキ党中央委員会代表である。いわば、ウクライナの革命の成否が彼の双肩に全面的にかけられたのである。彼は、現地に入り、ウクライナの民族復興運動の先頭を切ることになる。時として激しく、共産党の中央と対立することにもなった。政党の中枢部にあつてロシア人たろうとしたように見えるスターリンとは、心理構造が全く異なっていた言えよう。

スクリプニクに課せられた任務は、党中央の意志が貫徹する党組織をウクライナに編成することであり、具体的にはウクライナにあるポリシェヴィキの二つのグループを統合することであった。二つのグループの対立はウクライナの独立を指向するか、ロシアとの統合を指向するかという点にあったが、スクリプニクは、ロシアとの結び付きを保ちながらウクライナを独立させるという道を選んだ。

しかし、ウクライナに到着したものの、その地は外国軍の占領や反革命軍との内戦に見舞われる。スクリプニクは地方に逃れながらウクライナ政府を維持し、ソビエト軍の指揮にも加わった。ちょうど、プロレタリア革命の理論をひっさげて登場したレーニンが莫大な数の農民からなるロシアの現実にたじろいだように、スクリプニクも農民が多数を占めるウクライナの現実に直面した。彼には、ウクライナの革命がプロレタリアートだけで実現するとはとても考えられなかった。ロシア人およびロシア化された都市プロレタリア

ートと、大多数の国民をなすウクライナ人農民との間の対立が解けない限り、革命は成功しない。むしろ、ウクライナの農民こそ革命の成否を握っているとスクリプニクには思えた。

だとすると、革命を成功させるには、ウクライナ語とウクライナ文化を普及、発展させる他に道はない、こうスクリプニクは考えた。彼は、ウクライナ文学とウクライナ史を独学で学び、ウクライナの詩人シェフチェンコから影響を受けている。こうして、スクリプニクは、独立したウクライナ共和国、独立したウクライナ共産党、ロシア共産党との同等性を確保したコミンテルンへのウクライナ共産党の直接加盟を構想し、それをモスクワの党中央に向かって求め続けた。ソビエト同盟形成の後には、彼はウクライナ政府の権限を守るために抵抗し、民族共和国の権利を擁護する発言を一貫して繰り返した。

スクリプニクは、ウクライナ化が早すぎてもいけないが、遅すぎてもいけないと考えた。早すぎればロシア人労働者を敵に回すことになるが、遅すぎればウクライナ農民に対するソビエトの影響力を失ってしまうと考えたからである。スターリンをはじめウクライナ化の批判者たちは、「早すぎる」とか「行き過ぎだ」とは言ったが、その逆のことは言わなかった。この点が、スクリプニクと大きく異なる点である。

スクリプニクは、1920年からは労農監督部人民委員とウクライナ共和国外務人民委員、1922年に法務人民委員、26年には教育人民委員、27年にはソビエト同盟民族ソビエト議長。共産党第12回大会で中央委員候補、第15回大会で中央委員。このように彼は、党と政府の要職を歴任した。とりわけ、スクリプニクが教育人民委員にあった時期には、初等学校のウクライナ語化はほぼ完了し、中等教育から高等教育にかけてウクライナ語への転換が着実に進んでいき、ウクライナ文化は華々しく展開した。⁽¹⁾

たが時は移り1931年以降、地方の民族主義に対する共産党中央からの攻撃が始まり、1932年9月になるとウクライナ教育人民委員であるスクリプニクに対する攻撃も表面化した。スクリプニクは、1933年1月にウクライナ共和国人民委員会議長に就任しているので、攻撃にもかかわらずウクライナ共産党内ではスクリプニクは信頼を集めていた、むしろウクライナ独立の大きな期待が彼にかかっていたといえよう。だが、ついに1933年2月28日、彼は教育人民委員を解任される。⁽²⁾ 彼は、自己批判を拒み、猛烈な攻撃のなかでついに1933年7月7日に自殺してしまう。彼の死は、10年間続いたウクライナ化の終焉を意味したが、それ以上に彼の自殺は民族自決というロシア革命の理念の現実をも露呈させた。彼の死は、理念を唱えながら実際にはそれを否定するという革命の思想的な弱さと、革命政党のもたらした現実の悲劇を何よりも雄弁に物語っているかのようである。

彼の死後、1934年からは、ソ連邦内ではついに「大ロシア人的排外主義批判」の声は聞かれなくなり、やがて民族問題はタブーとなってソビエト型社会主義の政治舞台から消え去る。

ちなみに、ウクライナのロシア化を推進するために党中央から派遣されてきたのは、若き日のニキータ・フルシチョフであった。スクリプニクは、ロシア化を阻止しようと、フルシチョフを党宣伝部副部長から解任させる。そして、その数年後、モスクワの中央委員会書記に昇進したフルシチョフは、時流にのって、ウクライナ化を批判し、スクリプニクを民族主義的偏向と非難し、教育人民委員から解職させることになった。歴史の綾は、このように織り込まれていった。⁽³⁾

(1) ウクライナ問題に現れたロシア革命の性格

ウクライナ人はスラヴ民族の一員で、ロシアを大ロシアと呼ぶならウクライナは小ロシア、ベラルーシは白ロシアと呼ばれた。三者の深いつながりを示す呼び名である。しかし、見方を変えれば、ウクライナは長くロシアの支配下にあったということである。ウクライナは、ロシアに比べれば地理的には地中海に面し、気候的には温暖であったので、歴史的にはロシアより早く独自の文化を形成していた。ウクライナ語は、歴史的な支配関係を反映して、ロシア語とポーランド語の両方の影響を受けている。

ウクライナの独立問題は、ロシア革命の様々な側面を浮き上がらせる。第一に、民族自決が、単なる民族独立ではなく、特定の政治体制と政党のみに認められた点である。当時のロシア帝国の人口の約5分の1、すなわち3000万人を占める大民族が真っ先に民族自決権を行使するのは、当然といえば当然のことと考えられていたと思われる。しかも、識字の普及していないイスラム諸国に比べれば、独立するだけの文化的蓄積もウクライナには存在していた。ところが、フィンランドやポーランドと違い、ウクライナには社会主義体制でしかもボリシェヴィキ政権以外は認められなかったのであり、このような政権を樹立するためにロシア赤軍が直接に介入した。民族解放の思想が特定の政治団体の組織論に変質してしまったのである。

第二に、独立が自治の範囲内に限定され、ウクライナは外交・軍事・経済計画の権限を失い、最終的には教育など内政と考えられていたものさえも独自性を失うことになった。自治を否定し自決を唱えたボリシェヴィキの政治綱領は、全く逆の現実を作り出したのである。国家の枠を超えてこのような中央集権的な政治を作り出した原因は、共産党組織がロシア共産党という単一組織となっていたことにあると考えられる。ウクライナは、革命直後から平等の独自組織として国別の共産党を構想したのだが、これは実に見事に問題の本質をついていたというべきであろう。

第三に、ウクライナの政治活動家たちは、ウクライナの独立には文化的な独自性が必要であると考え、これまで抑圧されてきたウクライナの文化、とりわけウクライナ語の復活・確立を重視した。この政策は、「ウクライナ化」と呼ばれ、「土着化」という名でソビエト同盟全体に公認されたものである。だが、ウクライナが独立した文化を展望したのに対して、ロシア共産党は「土着化」とは現地語を解する党员や政府職員を確保し、中央の政策を徹底させる一手段にすぎないと見なし、限定的な解釈しか許さなかった。

第四に、ウクライナは、国内に少数民族を含み込み、国外にウクライナ人を取り残し、単一民族国家を形成することができなかった。しかも国内、それも都市部の工業労働者としてかなりの数のロシア人を抱え、統一的なウクライナ人像を造り出すことを困難にした。また国内のロシア人は、大国ロシアの文化的優位性を背景にして、ロシア的な文化、とりわけロシア語を普及させる原動力となった。ロシア帝国の支配装置がそのまま残り、さらに近代産業、労働者革命という歴史段階に入ってロシア人住民はますます大きな勢力となったと見るべきなのかもしれない。

第五に、言語のレベルでいえば、抵抗したにも関わらずウクライナではロシア文字がそのまま残り、やがてロシア語の流入に抗しきれず、教育の普及とともに母語の転換が起きてくる。

以上のような特徴は、ひとりウクライナにとどまらず、遅かれ早かれソビエト同盟内の

他の諸国に、あるいはロシア連邦の少数民族に徹底していくことになる。では、どのような論理で、これらの特徴が作り出されることになるのか、以下に検討していく。

ロシア革命以前、ウクライナに対してロシアは文化的な抑圧を加え続けていた。

1863年6月20日、ウクライナ語の出版物を禁止する内務大臣バリュエフの秘密政令が、アレクサンドル 世の承認のもとで下されている。その後の抵抗、とりわけ第一次ロシア革命の影響もあり、1905年にはキエフにおいて学校教育をウクライナ語で行おうとする最初の運動が起きている。学校における授業言語の問題は、その後ロシア国会(ドゥーマ)の議題にもなり、1908年の3月29日には小学校においてウクライナ語で授業することに関する法案が提起されている。このような流れもあって、1906年7月1日には、政府はウクライナ語の出版物を34例許可しており、その一つにロシアにおける最初のウクライナ語の日刊紙「ラーダ」が入っていた。

しかし、改革が進まぬ政治状況の中で、1913年から1914年にかけて、レーニンが民族問題を国会の場に持ち込んだ。1913年5月のこと、ウクライナのポリシェヴィキ、フリホーリー・ペトロフスキーは、国会において、政府はウクライナ語の使用を差別していると批判した。このときレーニンは、ロシア西部において、民族言語の問題は民族意識を高め、革命運動に有利にはたらくと判断していた。

ウクライナの民族派は、モスクワ文化の浸透を大ロシア人的支配と見なしており、ウクライナ人が二級国民として扱われていることに抵抗していた。都市のウクライナ人は、ウクライナ文化を破壊し、ロシアの支配に加担する者のように思われた。したがって、一度ロシア化された者も含め、ウクライナ語による教育によってウクライナ文化の確立を目指そうとした。それは、ロシア人とは異なるウクライナ人の確立を意味した。

ウクライナのロシア人などロシアとの統一を目指す活動家たちは、ウクライナ文化とウクライナ語の後進性、それに比してロシア文化の優位性をあからさまに唱えた。革命の成功と労働者の団結を建前にすると、民族の自決などどれほどの意味もなかった。

(2) 革命の前後と民族自決

なぜウクライナがロシアの影を引きずり、完全にロシアから独立できなかったのか。それは、革命の経緯に由来するように思われる。革命そのものが、ロシアの軍事力を背景にして、ポリシェヴィキ政権の介入によって実現されることになったからである。もし、民族自決の原則を最優先させれば、ウクライナにはポリシェヴィキ以外の革命政権が成立していたことはほぼ間違いない。ところが、歴史の歩んだ道は実際には違った。

1917年2月革命の後、キエフを拠点に、ウクライナ進歩主義者協会によって中央ラーダ()という政府組織が樹立された。ラーダは、ウクライナ部隊の形成、学校教育のウクライナ化など、自治の要求をロシアの臨時政府に求めたが、1917年6月にロシア政府によってこれは拒否された。10月のロシア革命の時点では、ウクライナの革命勢力としてポリシェヴィキの革命委員会以外に、臨時政府側の軍管区司令部と中央ラーダが存在しており、しかも中央ラーダには約2万の軍隊がついていた。ポリシェヴィキの劣性はおおい隠すべくもなかった。

1917年11月7日、中央ラーダは、ウクライナ人民共和国の創設を宣言し、ウクライナにおいては極めて早く革命は進行するかに見えた。革命の発祥地ロシアより先に、革命政府

の陣容を整えたからである。12月4日、ポリシェヴィキの発案で第1回ウクライナ労農兵ソビエト大会がキエフで開催されたが、ポリシェヴィキは代表者の4%という圧倒的に少数であり、彼らは大会から退場することになってしまう。退会したポリシェヴィキは、ハリコフに向かった。そこは、もう一つのポリシェヴィキであるドネツ・クリボイログ地区ソビエトが健在であった。両者は、合同して、12月11日に、第1回全ウクライナ・ソビエト大会を開催し、ウクライナにおけるソビエト権力の樹立が宣言された。ウクライナは、他ならぬ革命勢力によって分裂したのである。

こうして、ウクライナに二つの革命政権が樹立されてしまい、ポリシェヴィキとラーダは次第に対立を深め、そこへロシアから1917年12月上旬に約3万のソビエト赤軍が侵攻する。ポリシェヴィキは、この革命遠征軍を背景に、ウクライナ各地ですでに革命政権となっていたラーダを打倒し、ラーダ軍を撃退するなどして、ソビエトを樹立した。最終的に、軍隊はキエフに進撃し、1918年1月26日にウクライナ人民共和国政府、中央ラーダをキエフから追放した。その直後に、ハリコフからウクライナ・ソビエト政府を名取る人民書記局がキエフに移動した。ところが、1月27日に、プレストでドイツ、オーストリアと単独講和を締結していたラーダは、ドイツ軍とともに2月16日（新暦3月1日）にキエフに再入城する。人民書記局はキエフを撤退し、ドイツ・オーストリア軍の占領のもとウクライナは内戦状態にはいる。ソビエト軍は、ドイツ・オーストリア軍に比して弱体であり、ウクライナ外に追放されてしまった。革命勢力同士の争いは、このように展開した。そして、革命軍の争いと外国軍の支配に終止符を打ったのは、1918年夏にウクライナ全土に起きた農民の反乱であったといわれる。

ウクライナでは、さらにそこに、ロシアの旧勢力が加わってきたので、事態はもっと混乱した。帝政ロシアの將軍ベ・エヌ・ヴランゲリは、クリミアを占領した。イギリス、フランスの支持を受けていたといわれるが、確かに彼は1920年に撃退された後に亡命して1928年にブリュッセルで死亡している。同様に、ロシアの將軍ア・イ・デニキンも、ロシア革命後にドン地方で反革命軍を組織し、1919年夏からはウクライナ全土をも占領するに至る。1919年10月に彼は赤軍に撃退されるが、20年3月にフランスの軍艦で亡命して1947年に死亡している。このような具合で、ロシア革命以降およそ3年間は、社会主義政権の存在そのものが危うかったのである。

ロシア帝国の崩壊後ドニエプル流域で中央ラーダがウクライナ共和国を樹立しようとしていた頃、オーストリア帝国の崩壊後のガリシアで西ウクライナ人民共和国が樹立された。1918年11月のことである。西ウクライナ人民共和国は、中央ラーダのドニエプル・ウクライナとの合同を目指した。だが、その独立を認めないポーランドはすぐさま軍事行動を起こし、戦闘は1919年秋まで続いた。結局、ポーランドが勝利し、ガリシアはポーランド領となった。ウクライナ人の住む土地は、東のロシア領にも、西のポーランドやチェコ領にも広がっていたのである。さらに、北カフカスにもウクライナ人は離れて住んでいた。スターリンをはじめとして革命家たちには自治の能力が高いと見なされていたウクライナであったが、革命以前の予想に反し、ポリシェヴィキの強引ともいえる介入など幾多の要因を抱えながら、ウクライナの独立は実に複雑な経緯をたどることになる。

ウクライナの独立は、ロシア革命の当初から、ポリシェヴィキの内部では公式的に認められていたはずであった。たとえば、1919年12月のこと、ロシア共産党は第8回協議会の

決議において、ウクライナの独立を次のように確認していた。

「 1 . 民族自決権の原則の確固たる適用に基づいて、ロシア共産党はウクライナ社会主義ソビエト共和国の独立を認める立場に立っていることをもう一度確認する必要があると中央委員会は考える。

2 . ……この同盟形態はウクライナの労働者、勤労農民自身によって最終的に決定されるべきであるという立場にロシア共産党は立つ。

3 . 現時点におけるウクライナ社会主義共和国とロシア社会主義連邦ソビエト共和国との関係は……連邦的つながり（ ）であると定められる。」⁽⁴⁾

この時1919年12月28日、レーニンは、『ウクライナ労働者・農民への手紙』にて、ウクライナの独立に関して同様の見解を述べていた。

「これは民族の問題である。ウクライナが独自の独立ウクライナ・ソビエト社会主義共和国となり、ロシア社会主義連邦共和国と同盟関係を保つか、それともウクライナはロシアと合流して一つのソビエト共和国をつくるかという問題である。……ウクライナの独立は、ロシア社会主義連邦ソビエト共和国の全ロシア中央執行委員会も、ロシア共産党も認めている。それゆえ、……問題をウクライナの労働者と農民自身だけで、自らの全ウクライナ・ソビエト大会において決めうるということは、全く自明のことである」⁽⁵⁾

だが次のような歴史の経緯を見てみると、はたしてロシア革命政府は、民族自決の原則をどの程度尊重していたかが疑わしくなる。ウクライナの独立構想は、劣勢にあったポリシェヴィキが民族運動を取り込むための、政治情勢に応じた単なる見せかけ、もしくは譲歩だったのだろうか。

(3) ウクライナ共産党の独立構想

ウクライナにはポリシェヴィキだけでも二つのグループが存在した。一つはキエフを中心とした「南西地区党組織」、もう一つはハリコフを中心にした「ドネツ・クリポイログ地区党組織」である。両者には、ウクライナの独立か、ロシアの自治州として留まるかという意見の対立など、政治的なくい違いが見られた。両者の勢力基盤も異なっていた。この当時、ウクライナの都市は、農村とはずいぶん違った様相を呈していた。ウクライナ全土では、人口比にしてウクライナ人がおよそ 8 割、その他（ロシア人、ユダヤ人、ポーランド人など）が 2 割という勢力となっていたが、都市部ではウクライナ人の比率は 3 割にしかならなかった。逆に、都市では、ロシア人が多く、ロシア文化が浸透し、そこに住むウクライナ人もロシア化されていた。

都市の労働者を活動の基盤とするポリシェヴィキは、その実体はロシア人労働者であり、彼らは農村のウクライナ人の間に勢力を浸透させられないという最大の弱点を有していた。いわゆるプロレタリアートの社会主義革命という理論をあてはめると、都市は孤立してしまうことになる。これに反して、別の革命勢力であるラーダは、ウクライナ農民の高い支持を得ていた。一方にロシア人とロシア化された都市、他方にウクライナ人が圧倒する農村があり、「これら二つの間には、何らの交流もなく、相互理解さえほとんど無かった」⁽⁶⁾ というような様相を呈していた。したがって、革命には、ロシア人とロシア化した

ウクライナ人が担う都市の文化が、ウクライナ人の多数が担う農村の文化が、端的に言う
とロシア語かウクライナ語かという文化的な対立が持ち込まれた。革命政権は、どちらか
を選択するか、あるいはそれらをどのように組み合わせるかという問題に直面した。ロー
ザ・ルクセンブルクなど国際的な労働運動家、それにポリシェヴィキ中央の多数は、民族
自決の理念に反対もしくは消極的であった。彼らは、都市の文化を支持し、農民の遅れた
文化は労働者の文化に取って代わられるべきものと考えていた。これに対して、レーニン
とスターリンは、民族自決の原則に立ったので、民族の文化と民族の言語を擁護すること
になる。さらに、地域の民族派活動家たちがいて、民族の自立を最終目的としていた。こ
のような対立の中で、レーニンとスターリンの果たした役割は大きかったのだが、それ
でも民族派活動家たちとの溝は開いていた。民族の文化と言語に関する理論的問題を、ウ
クライナを例にとって検討していこう。

1918年1月の第3回ソビエト大会で、スターリンが報告した。ウクライナの民族自決は、
「民族ブルジョワジーではなく、勤労者大衆の自決として了解する必要がある」と述べた。
西部ロシア諸州との関係では、「ウクライナにはソビエトがあるが、リトワニアやポーラ
ンドにはない」と返答したという。⁽⁷⁾国内におけるウクライナ人労働者の力が弱いものの、
ウクライナはソ連邦内でも特別な位置にあるとみなされ、独立の最も高い可能性をもっ
ていたわけである。

内戦から疎開中のポリシェヴィキたちは、モスクワにおいて、1918年7月5日から12日
にかけてウクライナ共産党（ポリシェヴィキ）創立大会を持つ。中央委員の選出において
は、キエフを中心とした左派が多数派となった。指導部の中心メンバーであるスクリプニ
ク、ザトンスキー、ブーブノフ⁽⁸⁾は、ウクライナ・ソビエト共和国が独立するように、
ウクライナ共産党もロシア共産党からは独立した組織であるべきと考えていた。実際に、
スクリプニクは、そのような分離案を提案し、国際共産主義組織の第三インターナシヨナル
を通じて両者は結びつきを持つとしていた。ところが、大会の決議では、右派が巻き返
し、ウクライナ共産党はロシア共産党の一部であり、ロシア共産党の中央委員会と大会に
従属するという事になった。

ポリシェヴィキがほとんど力を持たなかった時期に、ウクライナの農民反乱を指導し、
ドイツ・オーストリア軍と戦いながら独立を目指したのは、ポロチヴィスト（ウクライ
ナ・エスエル）党であった。ポロチヴィストは、ソビエト革命を実現しようとする点では
ポリシェヴィキと変わらない。ウクライナのポリシェヴィキと異なる点は、ウクライナの
独立をきわめて重視して、独自のウクライナ赤軍を形成しながらロシアの介入（とりわけ
軍事介入）を拒否したことにある。1919年には、ポロチヴィストはウクライナ社民党左派
と合同してウクライナ共産党（ポロチヴィスト）を結成する。彼らは、コミンテルンにウ
クライナの共産党として参加を申し出たが、コミンテルンは1919年と1920年の二度にわた
ってこれを拒否した。1919年の時点では、レーニンはウクライナ共産党（ポリシェヴィキ）
の反対を押し切ってポロチヴィストへの譲歩を決断した。⁽⁹⁾だが、そのレーニンも1920年
にはいると、ポロチヴィストの解体・吸収を選択する。⁽¹⁰⁾ポロチヴィストに残された道
は、共産党（ポリシェヴィキ）に入党するか反ポリシェヴィキを貫くかしかなくなってし
まった。結局、1920年3月、約4000名にのぼる多くのポロチヴィストは前者を選択した。

ところが、歴史は二度繰り返した。1920年1月のこと、キエフでウクライナ共産党（ウ

カピスト)が旗揚げした。この第三の共産党は、ソビエト権力には賛成したが、ウクライナ社会主義共和国の独立とウクライナ語の公用語化を政治要求とし、ウクライナに対するロシア(つまりポリシェヴィキ)の介入を拒否し、ウクライナ赤軍の形成、ウクライナからのロシア軍の撤退を主張した。彼らもまた、ウクライナの共産党としてコミンテルンに参加を申請した。

ウクライナにおけるポリシェヴィキは足場を固めながら、1920年12月22日から29日にかけて開催された第8回全ロシア・ソビエト大会においてロシア共和国とウクライナ共和国の同盟条約が批准された。両者は、互いに独立した主権国家であり、平等の立場から軍事的・経済的同盟関係を結ぶとされ、軍事、海軍、最高国民経済会議、外国貿易、財政、労働、報道、郵政の各人民委員部が統合されることになった。教育は内政として残されたが、互いの独立国が、政府機関の統合、つまりは実質的にウクライナのロシアへの従属が形造られた。同様の方式は、2年後の1922年12月暮れの第10回全ロシア・ソビエト大会で、ロシア、ウクライナ、ザカフカス、ベラルーシの4共和国の同盟、つまりソビエト社会主義共和国同盟の形成に結実する。この時、スターリンの自治化案をレーニンが押し戻したいきさつがある。

しかも実際の同盟関係は、平等な独立国家の同盟という原則を崩す方向で実施されつつあった。1922年の春のこと、ウクライナ側から、同盟条約の履行が不適切でウクライナの主権を侵害していると批判の声が起きてきた。スクリプニクは、1922年3月から4月にかけて開催されたロシア共産党第11回大会の席で、「単一不可分のロシアとは、かつてのデニキン、ヴランゲリのスローガンである」と激しいことばでポリシェヴィキの方針を非難し、ウクライナの独立を強調した。スクリプニクは、1918年5月3日のロシア共産党中央委員会決定でウクライナの独立と同時に、独立したウクライナ共産党、第三インターナショナルへの独自の加盟が認められていたではないかと指摘する。重ねてまた、1919年の第8回党協議会では、ウクライナの独立が再確認されたではないかとも指摘する。⁽¹¹⁾この言葉は、ポリシェヴィキ政権が自らを裏切っていると指摘したことを意味する。

ウクライナの代表は、この後も批判と抵抗を繰り返し、ウクライナの主権の確保をロシアに向かって唱え続けた。

ソビエト同盟の樹立に関して、ウクライナ共産党(ポリシェヴィキ)は、1922年10月16日の中央委員会総会でソビエト同盟の形成を支持するものの、党学校ではウクライナ語教育を義務化し、党とソビエト機関ではロシア語とともにウクライナ語を採用することを決めた。ウクライナの独立を損なわない道が追求されたのである。当時のもう一つの共産党(ウカピスト)は、ソビエト同盟に加入することには強く反対した。

1923年4月17日から25日にかけて開催されたロシア共産党第12回大会は、民族問題が主要な議題となり、同盟関係の性格を左右する重要な議論が戦わされた。ウクライナの代表であるフリニコは、政府機関であるソビエト機構と共産党組織に「中央集権的な惰性」があると指摘し、民族主義を危険視すべきではないと主張した。⁽¹²⁾

同大会で、スクリプニクは、ロシアに住む700万人のウクライナ人がウクライナ語で活動できるようにすべきなのに、地方党委員会はロシア語で活動可能だと考えて何ら対策をとっていないと指摘し、大ロシア人的排外主義批判が地方の民族主義批判と相殺されて無視されている、「大ロシア人的排外主義に対する闘争は行われなかった」と批判した。ス

クリプニクのこの発言は、ロシア人自身が「大ロシア人的排外主義」と戦っていないという痛烈な批判であった。さらにまた、スクリプニクは、土着化の敵がウクライナ内部にいることを大会にて指摘した。⁽¹³⁾

ブハーリンも、スクリプニク同様、大国主義的排外主義と地方の民族主義を同列に論じるべきでなく、後者は第二段階の問題であるから、当面今回の決議からは地方の民族主義的排外主義の項を削除すべきであると主張した。

スクリプニクやフリニコらの独立した主権国家という主張は、1923年から24年にかけて、ソビエト同盟憲法の草案審議の会議を通じて何度も繰り返され、中央集権化を望む勢力との対立は続いた。憲法の同盟脱退保証条項は、ウクライナの主張で入ったとされる。

さて、第三の共産党であるウクライナ共産党（ウカピスト）への回答は1924年12月まで引き延ばされ、しかもコミンテルン執行委員会幹部会はウクライナ共産党（ウカピスト）の解散を決議した。こうして、1925年3月にウクライナ共産党（ウカピスト）は党の解散を決め、ポリシェヴィキ以外で最後に残った合法政党も消滅した。

二つの共産党の解体は、民族自決の実現形態がポリシェヴィキの指導者たちに極めて狭く解釈されていたばかりでなく、共産主義運動もまた制限されていたことを明らかにした。ロシア共産党に忠実なポリシェヴィキ以外は、革命勢力として残ることはできなかったということである。人類史的な解放思想と民族自決の思想が単なる政党の組織論におとしめられてしまったということである。だが、それでも、ポロチヴィストとウカピストの解体・吸収は、ウクライナのポリシェヴィキに対して独立志向を強く持つウクライナ人活動家を一時的に党内に補給することとなった。

ウクライナ語とウクライナ文化を復興させ、ウクライナの文化的自立を遂げるという土着化政策が1920年代にかなりの程度に容認されたのは、歴史的に形成された文化的な特質とともに、ウクライナ左翼政党の政治的な不安定がその理由としてあったため、共産党中央が一定程度妥協したからだと考えられる。さらに加えて、もう一つには、ウクライナは白軍と呼ばれた旧体制を支持する反革命勢力が軍事的に支配することもあり、革命派の行政的勢力が弱かったことである。したがって、ポリシェヴィキは、民族派を含めて革命勢力を取り込む必要があった。次に、南は黒海沿岸の港から外国勢力が白軍を支援をしたように、また東はドイツ、オーストリア、ポーランドとの国境確定が判然としなかったことから、ウクライナの独立という政治目標は、ロシアからの離脱以上の意味を持っていたことにある。

（４）ウクライナ化と土着化

土着化がいつソビエト共産党、いわゆるポリシェヴィキの政治路線として公認されたのか。1919年の党決定にはそのような政策はないが、1920年初頭に明確となり、1921年のロシア共産党第10回大会で承認され、実質的に公的な政策となったものと考えられる。⁽¹⁴⁾ だが1923年にウクライナ化がウクライナ共産党全体の政策と認定されたように、⁽¹⁵⁾ このような民族化が同年4月のロシア共産党第12回大会で党公認の概念となり、一般に普及したとみなす見解が普通である。⁽¹⁶⁾ 共産党第12回大会の決定は、民族領土、民族言語、民族要員（専門家）、民族文化という4つの民族的形態をともなう民族国家の建設であった。なかでも、民族言語の復活・発展と民族要員の育成・登用を促進するという二つの政策が

焦点となった。民族領土内では民族言語が公的に使用され、民族言語で話す党指導者、政府役人、学校の教員などを育成することが正当な形態であると確認されたのである。ただし、共産党第12回大会では、ウクライナ化とかウズベク化という個別の民族化を示す用語が使用されていたのであり、土着化という包括的な用語は、その後の民族政策の中に登場することになる。

しかし、問題はそれ以前に始まっていた。ウクライナでは、土着化の前史があったのである。1919年1月、ウクライナ政府は、「地域の労働者や農民の意志に従って学校における授業言語を決定する」ことを宣言した。

この年の後半、レーニンは、『ウクライナ政策に関するロシア共産党（ボ）中央委員会決定草稿』を書き、その筆頭事項としてウクライナ語とウクライナ文化に注意を払うよう指摘している。すなわち、9項目中の第1項目は、次のようになっていた。土着化の一側面がはっきり表されている。

「民族主義的伝統に対する最大の注意、ウクライナ語とウクライナ文化の平等性の厳格な遵守、全ての役人はウクライナ語を学ぶことを要求されることなど。」⁽¹⁷⁾

11月には、ロシア共産党中央委員会においてレーニンの草稿は承認され、12月の第8回党協議会の審議にかけられ、正式に決定として採択されることになった。⁽¹⁸⁾

この決定は、「政策的ウクライナ化」(declarative ukrainization)と呼ばれる一連の土着化政策の開始となったが、決定がすべての党員の義務となっていることに注意したい。1920年代には、ウクライナ共産党（ポリシェヴィキ）は、ウクライナ人の政党ではなかった。1922年4月1日の党調査では、ウクライナ共産党員で民族の確定できる者の民族比率を見ると、ロシア人が53.6%、ウクライナ人は23.3%、ユダヤ人が13.6%であった。党員の言語使用状況を見ると、ロシア語使用者が79.4%、ウクライナ語使用者は11.3%であった。⁽¹⁹⁾ 国民比率とは全く逆に、ウクライナ共産党では圧倒的にロシア人とロシア語の比率が高かった。ゆえに、ロシア語とロシア文化が圧倒するウクライナ共産党さえも土着化を実施したという事実には、何よりも注目する必要があるだろう。

このポリシェヴィキではウクライナを治められないとレーニンは判断したのであろう。だが、ウクライナ化は、ウクライナのロシア人あるいはその他の少数民族のロシア語使用者にとっては多大な負担をかけることになった点も忘れてはならない。

1920年2月22日のこと、モスクワにいたレーニンはハリコフに来ていたスターリンに

「軍の全ての部隊と司令部に即刻通訳を付けることを断固として要請する。すべての声明と文書をウクライナ語で出すこと。言語に関する全面的な譲歩と最大限の平等、これは無条件に必要である。」⁽²⁰⁾

という電報を打った。党が綱領によって母語による教育を認めていたとか、レーニンが国語の強制に反対していたという原則論もさることながら、ウクライナのほとんどの民衆はロシア語を理解できないことと、この民衆の力が革命政権に不可欠であったことをこの電報は物語っている。

1920年にポリシェヴィキに合流した民族派の元ボロチビストは、ウクライナ化を実質的に開始していた。この年の2月、ウクライナ中央執行委員会は、ウクライナ語をロシア語と同等に扱う決定を下している。また、この年にフリニコがウクライナ共和国教育人民委員となると、彼は、9月21日に、学校の授業言語としてウクライナ語を導入する措置を公

布したのである。

確かに、1921年3月のロシア共産党第10回大会にて、スターリンは、「もし今に至るまでウクライナの都市ではなおロシア的要素が優勢であるとしても、時がたつにつれて、これらの都市が必ずウクライナ化されることになることは明らかである」とさえ言い切った。⁽²¹⁾このとき、スターリンの頭には、ウクライナ化の過程は脱ロシア化の過程として理解されていた。さらにまた、この時、ベラルーシの例を引きながら、「自分自身の言語を持つベラルーシ民族」というものが実際に存在しており、したがって「ベラルーシ民族の文化の向上はただその母語によってのみ可能」であると主張している。このようにはっきりと、スターリンは母語の重要性を指摘していたのである。ウクライナにおいてウクライナ化を進める活動家にとっては、スターリンの言葉は大いなる支えになったことは間違いない。

しかし、党中央の活動家の間では、ウクライナ化に対する反対が根強かった。1922年秋には、「ウクライナ化の急ぎ過ぎ」を理由にして、教育人民委員のフリニコが解任された。これにより、ウクライナ化は挫折するかに見えた。フリニコの後任は、ザトンスキーになった。これが、ウクライナ化の第一番目の危機である。

1923年、人民委員会議長がウクライナ人のチュバー、教育人民委員がシュムスキーになり、ウクライナ化は復活する。シュムスキーもまた、フリニコ同様に元ボロチヴィストで、ウクライナ化の熱心な推進者であったのである。

ウクライナ化()が公式に宣言されたのは、1923年4月のウクライナ共産党(ボリシェヴィキ)第7回協議会であり、同時に4月のロシア共産党第12回大会以降は「土着化」()としてソビエト全土に認められた共産党の政策である。だが、土着化の確認も簡単にいったわけではなかった。

ロシア共産党第12回大会においては、民族問題について、率直な意見が交わされていた。トロツキーは、「党の最重要課題の一つは、兄弟愛の精神、および排外主義的ムードに対する容赦ない反撃の精神での赤軍の教育である」との一節をテーゼに挿入することを提案した。さらにトロツキーは、ウクライナのスクリプニクとの論争にて、次のような文化論を展開した。トロツキーは言う。

「ウクライナの人民が自らの言語、自らの文学の助けを借りて、ロシア文化を含むあらゆる文化への通路を見いだすのを、妨げている。イギリスの文化はロシア文化より一段と高度である、しかしそれは全てのロシアの学校を閉鎖する必要があるということの意味はしない」⁽²²⁾。

これに対して、ウクライナのスクリプニクは、反論する。

「彼は他の全ての文化に関してロシア文化が優越しているとの旗の下に発言している。これはわれわれの活動の道をふさいでいる。……もっとも高度なロシア文化への通路を得る機会を、植民地諸民族の代表に提供するという点に関するトロツキーの修正は、……受け入れてはならない。あたかも一つの文化に他の全ての文化よりも高度な資質が固有に備わっているかのごとき仮定を生み出すような部分は取り入れてはならない。」

トロツキーも反論して、

「ロシアがより遅れていてイギリスがより進んでいること、ここには開きがあるこ

と、都市の文化は農村の文化よりすぐれていること、このことをあなた方は否定できないのだ。われわれの課題は、農村に対して都市の文化への通路を与えること、ロシアに対してイギリスの技術、イギリスの文化への通路を与えることである」⁽²³⁾

と突っぱねた。トロツキーは、民族語や民族文化がより高度なロシア文化への通路を見いだすことをよしとし、最終的にはロシア文化を受け入れることを主張した。民族文化の独自の発展などおよそ念頭になかった。トロツキーは、都市労働者に依拠するマルクス主義に忠実な民族論を展開したので、文化的差異を経済発展の度合いから量ることとなったのである。トロツキーの主張は、高度な「同化論」、いわゆる「統合論」に他ならない。トロツキーもまた、スターリンと同じく、しかもストレートにロシア人たろうとしたことがうかがえる。彼は、ロシア文化さえ遅れていると言ったのではあるが。

この、ロシア共産党第12回大会では、大ロシア人的排外主義が「主要な危険」であると指摘され、非ロシア民族の言語や文化を優遇する政策が確認された。そこで、その対極にある土着化は共産党の中央に積極的に支持されたものと一般的に解釈された。

実際にウクライナ化はスタートし、初等学校のうちウクライナ語学校の割合は、着実に増加していった。また、赤軍はウクライナ語を使用し始め、いわゆるウクライナ赤軍が形成された。

ウクライナでは、土着化は「ウクライナ化」と呼ばれたが、その内容は、ウクライナ語による教育、ウクライナ語の出版物・マスコミの拡大、行政機関のウクライナ語使用、党と政府諸機関へのウクライナ人の登用というものであった。とりわけ、他の民族の土着化と異なる点は、その徹底ぶりであろう。最初は党と政府機関でウクライナ語のみが採用された。そのために、これらの諸機関の全職員にウクライナ語の習得が義務づけられた。都市の労働者も、ウクライナ語を習得して職場でウクライナ語を使用することが奨励された。ロシア語との二語使用が後期に認められたが、ウクライナ語の優先は続いた。教育においては、学校において使用される言語をウクライナ語にする、つまりウクライナ語学校への転換であった。しかも、初等教育から高等教育まで、ウクライナ語化が追求された。ウクライナ化は「1923年から1933年の間、党・政府の公式の路線、政策であった」⁽²⁴⁾とみなせる。

(5) スターリンの理解した土着化

ラーリン(ミハイル・ルーリエ)は、1925年、様々な共和国で少数民族の要求が無視されていると共産党の民族政策を批判し始めた。たとえば、ウクライナのロシア人がそれにあたるといふ。

そこへ、スターリンの直接介入が起きる。批判の対象は会談相手のシュムスキー、および一例としてあげられたフヴィリョヴィーのウクライナ文化論に対してであったが、スターリンの意図はウクライナ化全体を批判することにあった。

フヴィリョヴィーは、1925年から活発に活動し、ウクライナ文化の確立はロシア文化からの独立なくしては達成されないと主張していたのである。

これに対して、スターリンは、1926年4月26日に、カガノヴィチその他のウクライナ共産党(ボ)中央委員会政治局員に手紙を送った。

スターリンは、ウクライナの文化と社会生活のための広範な運動が、ウクライナで始ま

り、発展しているというのは正しいが、「わが党機構やその他の機構のウクライナ化をプロレタリアートのウクライナ化と混同している」と言って批判した。形式において民族的にという論理と類似した発想である。さらに、「ロシア人労働者大衆に強制してロシア語とロシア文化を棄てさせ、ウクライナのそれを自分の文化であり、自分の言語であると、認めさせてはならない」と主張した。なぜならそれは、「上からプロレタリアートをウクライナ化」することであり、「諸民族の自由な発展という原則に反する」ことであり、「独特な形態の民族的な抑圧」であるとスターリンは言う。⁽²⁵⁾ かわりにスターリンが望んだのは、「自然成長的な過程」であった。

確かに、スターリンは、ウクライナ国内の少数民族の抑圧という重要な問題を指摘した。だが、ウクライナ化を「自然成長的な過程」に任せればロシア化になってしまうことをスターリンは見越して、このような発言をしたのである。それが証拠に、スターリンは、以下のように論理を展開した。

いまのウクライナ化は、「非共産主義的なインテリゲンツィアに指導されている」のであり、この運動は「ウクライナ文化とウクライナの社会生活を全ソビエト的な文化と社会生活から疎外するための闘争」という性格をとり、『モスクワ』一般に反対し、ロシア人一般に反対し、ロシア文化とその最高の成果であるレーニン主義とに反対する闘争」という性格をとる恐れがある。その一例は、「有名な共産党員フヴィレヨヴィー」の論文で、彼はウクライナの「プロレタリアートを即時非ロシア化せよ」、「ウクライナ詩はロシア文学から、そのスタイルから、できるだけ早く離脱すべきである」、「プロレタリアートの思想ならモスクワの学芸がなくてもわれわれには知ることができる」と言っているではないか。⁽²⁶⁾

このような「非マルクス主義的な試み」を「ウクライナ共産党員」が口にするというのは「奇妙」ではないかと、スターリンは指摘する。西欧のプロレタリアと西欧の共産党は、「国際革命運動とレーニン主義の砦である『モスクワ』への愛着に満ちている」のに、また西欧のプロレタリアたちが「モスクワで翻っている旗を歓喜しながら眺めている」のに、ウクライナの共産党員フヴィレヨヴィーは「モスクワ」から「できるだけ早く」離脱するように呼びかけているではないか。「しかも、それが国際主義と呼ばれている」ではないか、とスターリンは不満をぶちまけた。

かわりにスターリンが望んだことは、「モスクワ」のためになることを述べること、「ウクライナ文化とウクライナの社会生活を、ソビエト的な文化と社会生活に転化させる」ことであった。

この時、フヴィレヨヴィーは、ウクライナ人は「モスクワの力を借りなくても」つまり「モスクワを経由しなくてもプロレタリアート思想を確立できる」という意味のことを述べたわけである。スターリンは、これに対して、「モスクワ」とロシアとの結びつきを強調している。恐らく、スターリンが最も恐れたのは、内容において党中央のコントロールがきかなくなるということであつたらう。彼にあつては、国際主義とは、国際共産主義のことで、それはモスクワに結集することではしかなかった。ここに至って、ウクライナ化と、スターリンの理解した土着化との違いがはっきり見えてくるだろう。スターリンは、決して、各民族が自民族の言語で自民族の文化を発展させ、独立することを展望していたわけではない。スターリンが望んでいたことは、せいぜい、党と政府機関でウクライナ語がで

きる共産党員を働かせようとしていたにすぎない。この場合のウクライナ語は、ロシア語で表現された思想をただ単にウクライナ語に翻訳すればよいのであって、独自の思想を表明するものではない。これこそが、スターリンの土着化理解であったのだと見なせるだろう。かわりに、ロシア語とロシア文化を手つかずのままとし、強制せず、自然成長的な過程に任せれば、ロシア化が進展することを見通していた。この背後には、土着の言語や文化よりも、ロシア語とロシア文化の方が優れているという判断が横たわっているだろう。スターリンのこの発言は、1921年のロシア共産党第10回大会に比べれば、表現手法が全く異なっている。これもまた、スターリンの本心だったと見るべきであろう。言い換えれば、1925年にスターリンが定式化した「内容においてはプロレタリア的で、形式においては民族的」という命題の本意は、内容が民族的であってはならぬと読むべきであろう。そのことが、この事件を機にはっきりするであろう。

ついでに、スターリンのこの手紙では、フリニコをウクライナ共和国人民委員会議長長としては拒否すると伝えている。ウクライナ共和国教育人民委員のシュムスキーは、スターリンに対して、ウクライナ共産党がロシア人共産主義者に支配されていると不満を述べたわけである。ウクライナ共産党の第一書記が代々ロシア人であることは不自然である、ウクライナ人民委員会議長にフリニコを任命してほしいと、シュムスキーはスターリンに迫ったのである。

1926年6月2日から6日にかけてウクライナ共産党中央委員会総会が開催された。スターリンの後ろ盾を得て、カガノヴィチは、シュムスキー批判を展開することになる。シュムスキーが一貫したボリシェヴィキでなかったという点も批判材料となった。ロシアとの統合を唱えてきた右派のリーダーのチュバーリは、プロレタリアはロシア文化の影響下にあるのであって「モスクワからの離脱」は誤っていると批判を展開した。それでも、この総会は、「モスクワからの離脱」はウクライナの排外主義であると批判しながらも、ウクライナ化をさらに進めることを確認した。これに対して、モスクワの党中央は、ラーリンに発言の機会を与え、ウクライナ批判を続けた。

こうして、1926年から1927年にかけて、ウクライナ化は二度目の危機を迎えた。この時点の政治勢力は、ウクライナ化を指標に見ると、急進派（フヴィリョヴィー、シュムスキーなど元ボロチヴィストなど）、穏健派（スクリプニク、ザトンスキーなど）、反対派（レーベジなど）と三勢力に分かれていた。⁽²⁷⁾1927年3月のウクライナ共産党中央委員会総会では、ウクライナ化急進派が批判され、シュムスキーは教育人民委員を解任された。後任は、スクリプニクとなった。さらに11月のウクライナ共産党第10回大会にて、ウクライナ化急進派が最終的に批判された。外国帝国主義の武力援助のもとにブルジョワ政府を樹立しようとして望んでいた、というのがその理由である。シュムスキーは、1930年に自己批判するものの1933年に逮捕され、その後は定かではない。

ウクライナ化急進派の排除の後、1927年4月から6月にかけてウクライナ化の修正が行われた。その結果、ロシア語はロシア・プロレタリアートの言語であるので特別の配慮が払われるべきであるとしてロシア語の地位が高められ、ロシア語がウクライナ語とともに授業言語、政府関係で使用される言語となった。また、鉄道の駅の表示もウクライナ語とロシア語の二語表示になった。ウクライナ化穏健派のとった行動は、ロシア側にかんがりの譲歩をするものであった。

しかし、教育人民委員の後任となったスクリプニクは、引き続きウクライナ化を進めた。教育の分野におけるウクライナ化の焦点は、中等教育から専門教育である中等専門学校と大学に移っていた。工業を発展させるには、技術者不足を解消しなければならない。そのためには、ウクライナ人を農村から受け入れ、都市の労働者として受け入れることである。ところが、都市の中等学校、とりわけ技術系の学校はロシア語のみが使用されているという現状である。スクリプニクは、ウクライナ語学校をさらに拡大しようと実行した。

そしてまたこの年、教育人民委員のスクリプニクは、別の動きもした。ウクライナ語正字法を統一するために言語学者の会議を主催し、委員会の長となり、正字法を確定した。会議は、1927年6月に行われた。時期的に、明らかに、東方の文字改革の動きと連動している。彼は、ラテン文字のzやsをウクライナ語の表記に導入して、ロシア文字の や を避けようとした。しかし、モスクワの党中央の勢力は、これに介入しこの動きを止めた。委員会は、翌1928年9月に改革案をとりまとめた。ウクライナ語の音声表記原則を作成し、かなりうまくウクライナ語の音声表記を達成したようである。だがしかし、この時のスクリプニクの行動が、後に反ロシア的として批判される一つの論点となったのである。

審議の中で、西ウクライナの言語学者グループ（M.ヨハンセン、B.トカチェンコ、M.ナコネチュニイ、A.プイリベンコ、W.シモヴィッチ）が、ウクライナ語のラテン文字化を要求している点も注目される。これにはスクリプニクも賛同したようである。⁽²⁸⁾しかし、ロシア側の発言者は、ウクライナの労働者大衆とロシアとの間に文字の上で大きな差異を作り出すことになり、障害になると反対した。ウクライナの言語学者たちは、当時開始されていたイスラム諸国におけるトルコ文字のラテン文字化を引き合いに出しながら、またマルの言語統一観や、「ラテン文字はレーニンの民族政策を実現する強力な手段である」というスローガンを引用してラテン文字化を主張した。しかし、ロシア側の賛同が得られずに、ロシア文字を残すことになってしまったのである。

さらにまた、ウクライナとロシアの教育人民委員部主催の教育職員大会にて、ロシア側は教育制度の統一を課題にしたが、ウクライナ側はそれを認めながらも、スクリプニクは真の土着化を強く望み、「文化ギャップ」という名で不平等を取り除くことを望むと表明した。⁽²⁹⁾

（6）ウクライナの少数民族とロシア連邦内のウクライナ人

1926年国勢調査によると、ソ連邦の総人口は1億4664万人であり、そのうちロシア人は7779万人、ウクライナ人は3119万人であった。ロシア人のうちロシア語を母語とする者は99.7%であるが、ウクライナ人でウクライナ語を母語とする者は87.1%（2717万人）と低く、ウクライナ人のなかにロシア語を母語とする者は約13%（400万人）あった。ウクライナ共和国の人口は2902万人で、農村部では87%、都市部では47%がウクライナ人住民であった。ウクライナ人は、ウクライナ共和国に約2320万人いて、国民の80.1%を占めていた。ウクライナ人は、ウクライナ共和国外にも居住しており、ロシア連邦内に約790万人もいて、うち310万人が北カフカスに、またクバン - クラスノダール地方に90万人いたのである。この数だけでも、ロシア連邦内にウクライナ自治政府が形成されるだけの規模にあった。逆に、ウクライナ共和国内にはロシア人が270万人いて、ウクライナ国民の7.3%を占めていた。ところが、ウクライナ共和国内でロシア語が読み書きできる人間は700万

人いることになっているので、多く見積もって430万人のウクライナ人がロシア語を使用していたことになる。都市のウクライナ人は、1926年の時点で、かなりロシア化されていたわけである。⁽³⁰⁾

共産党およびロシア連邦政府も、少数民族の意志を反映できるように、1926年には民族区、民族村ソビエト、民族コルホーズが形成され始めた。1930年時点で、250の民族区と5300の村ソビエトが設立されていたが、その半分はロシア連邦のなかにあった。

北カフカスのウクライナ人の多くは、1920年代初頭では、ウクライナ共和国との民族合併には反対していた。その理由は、多くの、たとえば1926年時点で42.9%のウクライナ人がロシア語を母語と見なしていたからである。逆に、ロシア政府もウクライナ人を同化させる政策はとらなかった。ロシア連邦内には、130のウクライナ民族区と4000のウクライナ都市ソビエトが形成されたという。⁽³¹⁾ 1930年2月12日付のソビエト同盟中央執行委員会常任委員会勧告に基づいて、民族ソビエトはある決議をあげている。それは、北カフカスのウクライナ民族区が十分にウクライナ化されておらず、今後ウクライナの文化センター、劇場、図書館を建設するように奨励するというものである。ロシアにおいても非ロシア人の土着化が広く取り組まれていたことは、特に留意する必要があるだろう。

スターリンから非難の目を向けられた少数民族問題であるが、ウクライナ政府も国内の少数民族の教育にはかなりの努力をしていた。1930年時点で、ウクライナ共和国には、ロシア人行政区が9、ドイツ人行政区が8、ベラルーシ人行政区が4、ユダヤ人行政区が3、ポーランド人行政区が1、合計28の民族区があった。⁽³²⁾

ウクライナ国内第二の少数民族は、ユダヤ人で、200万人近くの人口があった。ユダヤ人の授業言語には、ヘブライ語でなく日常生活で使用されているイーディッシュ語が採用された。ウクライナのユダヤ人学校は600校あり、12万人の生徒が通学していた。他に、6校の専門学校、2校の師範学校、1校の農業学校、それにハリコフ総合大学ユダヤ学科があった。また、ユダヤ問題を総合的に扱う研究所が設置された。ユダヤ人が住民のほとんどであるというユダヤ人行政区が3つあり、新聞・雑誌といったイーディッシュ語の定期刊行物が15種類あった。⁽³³⁾

ウクライナのロシア人に対しては、ロシア共和国から教師の派遣や、教科書や様々な文献が送られてくるので、ウクライナ政府には負担は少なかった。その他、ウクライナのポーランド人は、1つの行政区、650のポーランド人学校、2校の専門学校、1校の師範学校、ポーランドプロレタリア文化研究所を持っていた。ドイツ人向けにも、600校の学校があった。

ギリシャ人は、黒海を経由して、すでに17世紀にはアゾフ海の周辺に入植していた。ギリシャを離れて長年たっているため、彼らを使用している言語は現代ギリシャ語とは大きく異なっていたが、革命後の授業言語には現代ギリシャ語が採用された。教員養成と教科書の作成には、困難がつきまとったようだ。ギリシャ人たちは、1校の師範学校と、1つの印刷所、1つの日刊紙を持っている。これらの少数民族に比べれば、ブルガリヤ人やチェコ人はほんの少数しかいない。チェコ人の生徒は、1500人で、教科書85セットあればよかったという。⁽³⁴⁾

(7) 土着化の成果

ウクライナ語学校の進展は、急速であった。初等学校では、ウクライナ人をウクライナ語学校で教育できるまでになった。まさに、党綱領で約束した、母語で教育を受ける権利がウクライナでは実現したのである。学校比率が約8割で止まっているのは、ウクライナ内の非ウクライナ人（ユダヤ人やロシア人など）が存在したからである。

ウクライナ語初等学校の割合

1923年	50%
1924年	61
1926年	79.1
1926年（10月17日スクリプニク報告）	87.8
1928年	82.4

中井和夫『ソヴェト民族政策史』259、263、291ページ

ウクライナ語で授業を受ける生徒の割合

1923年10月1日	61
1927年末	75.8

Roman Solchanyk, Language Politics in the Ukraine, p.71.

ウクライナ語高等教育

	学 校 数		生 徒 数	
	総数	ウクライナ語学校数（比率）	総数	ウクライナ語学校在学生徒数（比率）
1923年	41校	8校（20%）		（25.2）
1929年	42	14（33%）		（56.1）

中井和夫『ソヴェト民族政策史』291ページ

中等教育や高等教育のウクライナ化が遅れたのは、ウクライナ語による専門用語の確定、教材、教科書の作成、教師の養成など、長期の準備段階が必要だったからである。だがこれらのデータから判断すれば、「都市・労働者のウクライナ化という20年代半ばまでは困難であった課題が、30年代はじめ極めて急速に進展・実現しつつあったまさにその時に、党・政府はウクライナ化政策を放棄した」⁽³⁵⁾のである。

つまり、中等専門教育や高等教育をウクライナ化し、自前で専門家を養成し、工業化、近代化を達成できるところまでウクライナはたどり着いていた。なのに、あるいはそれだからこそかもしれないが、ウクライナ化は中止される。

(8) ウクライナ化の終焉

スクリプニクはウクライナ化政策を推進し、ウクライナ共産党はもっとも長く抵抗を続けたが、1930年代初頭にはこの政策が最終的に批判され、そして意外なことを原因にしてその息の根を止められることになる。

1932年のこと、ソビエトは飢饉に見舞われた。食糧が不足し、スターリンは強引な食料調達を決心する。すなわち、農村の農民から強制的に穀物を奪取し、都市の労働者に配布しようというのである。不作は、ソビエトの穀物地帯、すなわちウクライナ人が多く住む地域で起きている。スターリンは、食糧不足を農民、すなわちウクライナ人の政治的な抵抗あるいはサボタージュと見なし、容赦ない弾圧を行うことを決意する。時に、ウクライナ共和国と北カフカス地方がターゲットとなった。民族意識が疑われ、マイナスに作用したのである。

1932年8月11日、スターリンはカガノヴィッチに手紙を書いている。彼は、そこで、ウクライナ共産党への介入を主張している。

1932年10月、共産党の政治局は、カガノビッチを代表とする調査団を北カフカスに派遣することを決めた。現地に到着したカガノビッチは、穀物調達の不足はサボタージュであると地方の党役員を厳しく叱責した。調査を終えたカガノビッチは12月14日にモスクワに到着するが、それを待って政治局は、ウクライナと北カフカスにおける穀物供給失敗の原因はウクライナの民族主義的抵抗とウクライナ化政策にあると断定した。そして、この抵抗勢力は、クラークと呼ばれる富農、役人そしてコサック移住者であると見なした。この日の決定には、ボルタワ市のクバン・コサック地区がそっくり「穀物供給のサボタージュ」を理由にして追放されることまで含まれていた。地域ぐるみのこの追放は、民族問題でなく、富農のサボタージュに対する政治的措置として処理されたのだが、地域住民全員が富農であるという説明には無理があると言わねばなるまい。この結果、6万人のコサックが追放され、代わりにその土地には1万4090人の赤軍兵士、およびその家族が移住した。⁽³⁶⁾これが、ソビエトにおける民族浄化的手法を適用した最初のケースとなった。

1933年には、ウクライナを肅正の波が襲い、民族主義者たちが次々に逮捕された。その理由は、ドイツのナチズムに呼応してソビエト同盟からウクライナを分離させようとする策動にあるとされた。この論理によって、ソビエトにおいてはロシアと異なる政治や文化を求めることは事実上不可能になってしまったのである。そして、2月28日に教育人民委員を解任されたスクリプニクは、猛烈な攻撃のなかでついに7月7日に自殺してしまった。

こうして、ウクライナの民族解放と民族確立という革命運動は挫折する。高らかに歌いあげられた「民族自決」の思想は、悲劇的な現実をもたらして終わりを告げた。ウクライナの独立運動とそれに対するロシア共産党の介入の歴史を見ただけでも、社会主義における民族理論がいかに恣意的で曖昧なものであり、歴史に翻弄されるものであったがわかるだろう。

(注)

- (1) Yaroslav Bilinsky. Mykola Skrypnyk and Petro Shelest: An Essay on the Persistence and Limits of Ukrainian National Communism. Jeremy Azrael (ed), *Soviet Nationality Policies and Practices*. New York; Praeger, 1978.

- (2) Bilinsky, 1978, p.107 では、教育人民委員を1933年 1 月に辞任していることになっており、2 月に解任されたのは人民委員会議長ということになる。
- (3) 高杉一郎『スターリン体験』岩波書店、1990年、14-15ページ。彼は、こんなフルシチョフとウクライナの関係に注目している。
- (4)
- (5)
- (6) Roman Solchanyk, Language Politics in the Ukraine. I.T.Kreindler (ed), *Sociolinguistic Perspectives on Soviet National Languages, their Past, Present and Future*. (Contributions to the Sociology of Language. 40), WG: Berlin; Mouton de Gruyter, 1985, p.63.
- (7) スターリン「第 3 回全ロシア労・兵・農代表ソビエト大会での演説」『スターリン全集』第 4 巻、51 - 57ページ。ただし、後者の記述は省かれている。ここで、スターリンは、民族自決をブルジョワ民主主義のレベルと異なって理解している。
- (8) プーブノフは、この時、ウクライナ共産党の中央委員と中央軍事革命委員会議長に選出されている。彼は、ルナチャルスキーの後任として、ロシア共和国教育人民委員となる。
- (9)
- (10) , .40, .122. この資料の日付とレーニンの意図については、中井和夫『ソヴェト民族政策史』お茶の水書房、1988年、218-219ページの注146を参照。
- (11) () , 1961, .73-74. 中井和夫の指摘では、スクリプニクの発言は 5 月18日でなく 5 月 3 日である。(『ソヴェト民族政策史』224ページ)
- (12) () , 1968, .503-504. ゲ・エフ・フリニコは、元ボロチヴィスト、ウクライナの教育人民委員。レーニンに「グリニコが……吠えている」と書かせた。フリニコは、16歳から社会革命党に入党し、ロシア革命以後、ウクライナ左翼社会主義政党である「ボロチビスト」黨員として活動。1920年に、ウクライナ共産党に移籍。1919-1926年には、ウクライナ・ソビエト政府の委員として活躍。全ウクライナ軍事革命委員、教育人民委員、 Gosplan 議長、ウクライナ共和国人民委員会議長、その他の要職を歴任。また、ウクライナ共産党中央委員でもあった。1926-29年には、ソビエト同盟 Gosplan 議長となり、展望計画中央委員会議長として五カ年計画の作成を指導した。1929年からは、ソビエト同盟農務人民委員、ソビエト同盟中央執行委員になる。
- (13) () , 1968, .572.
- (14) Terry Martin, *The Affirmative Action Empire: Nations and Nationalism in the Soviet Union, 1923-1939*. Cornell University Press, Ithaca, 2001, p.10.
- (15) Yaroslav Bilinsky, Mykola Skrypnik and Petro Shelest: An Essay on the Persistence

and Limits of Ukrainian National Communism. *Soviet Nationality Policies and Practices*. Jeremy Azrael (ed), New York; Praeger, 1978, p.115. この論文で、ピリンスキーは、ポーランド人の歴史家ラジヨフスキーは、本格的なウクライナ化運動の開始時期を1925年4月としていると紹介している。(Janusz Radziejowski, *Kwestia narodowa w partii kommunistycznej na Ukrainie radzieckiej (1920-1927)*, *Przegląd historyczny* 62, no.3, 1971, p.485.)

- (16) George Liber, Korenizatsiia: restructuring Soviet nationality policy in the 1920s. *Ethnic and Racial Studies*, Volume 14, Number 1, January 1991, p.15.
- (17) B. N. . . . 1891-1922 . M., . . . , 1999. c.306.
- (18) () 1919 1961. . 189-190.
- (19) Yaroslav Bilinsky, Mykola Skrypyk and Petro Shelest: An Essay on the Persistence and Limits of Ukrainian National Communism. in the Jeremy Azrael (ed), *Soviet Nationality Policies and Practices*. New York; Praeger, 1978, p.112.
- (20) 51, . 141-142.
- (21) スターリン「民族問題における党の当面の任務に関する結語」(1921年) 5, . 48-49. 『スターリン全集』第5巻、59-60ページ。
- (22) , No.4, 1991, c.167.
- (23) , No.5, 1991, c.160.
- (24) 中井和夫『ウクライナ』御茶の水書房、1988年、255ページ。
- (25) スターリン「同志カガノヴィチその他のウクライナ共産党(ボ)中央委員会政治局員に」『スターリン全集』第8巻、180ページ。
- (26) 同、181ページ。 の訳が、全集では「芸術」となっている。
- (27) 中井和夫『ソヴェト民族政策史』東京大学出版会、1998年、273ページ。
- (28) Roman Smal-Stocki, *The Nationality Problem of the Soviet Union and Russian Communist Imperialism*. US: Milwaukee; The Bruce Publishing Com., 1952, p.125.
- (29) ; , 1929, c.39-40.
- (30) Terry Martin, *The Affirmative Action Empire: Nations and Nationalism in the Soviet Union, 1923-1939*. Cornaell University Press, 2001, p.405, 46. および Gerhard Simon, *Nationalism and Policy toward the Nationalities in the Soviet Union: From Totalitarian Dictatorship to Post-Stalinist Society*. US: Westview, 1991, p.42. など。
- (31) Terry Martin, The Origins of Soviet Ethnic Cleansing. *The Journal of Modern History*. 70 (December 1998), p.844.
- (32) 4, 1934, . 42.
- (33) Beatrice King, *Changing Man: the Education System of the USSR*. London: Victor Gollancz Ltd., 1936, pp.301-303.

(34) Ibit.

(35) 中井和夫 『ソヴェト民族政策史』東京大学出版会、1998年、295ページ。

(36) Terry Martin, The Origins of Soviet Ethnic Cleansing. *The Journal of Modern History*.
70 (December 1998), p.846.